筆談ホステスら体験語る

障害者のコミュニケーション支援を討論

人権を尊重し合えるまちづくりを目指す「あかしヒューマンフェスタ」が27日、明石市立市民会館（中崎1）であった。障害がある人のコミュニケーション支援をテーマにパネル討論が行われ、東京都北区議で「筆談ホステス」としても知られる斉藤里恵さんらが意見を交わした。（井原尚基）

障害者との意思疎通をめぐる課題を語り合うパネリスト＝いずれも中崎1

市民会館「接し方、理解して」

人権週間（12月4～10日）に合わせて市などが開き、市民ら約600人が訪れた。

1歳で聴力を失った斉藤さんは、相手の口の動きを読み取る方法と筆談を併用しているが「道ばたでの雑談が難しい」と説明。「健常者は障害者への接し方が分からず、結果的に差別的な態度を取ってしまう場合がある。一方、接し方を理解し、優しい対応になった瞬間に何度も出会えたのはうれしい経験だ」と振り返った。

3歳で失聴した県立聴覚障害者情報センター所長の嘉田眞典さんは、クレジットカードを紛失して再発行を依頼した際、電話での本人確認を求められ、すぐに手続きができなかった体験を紹介。「耳が聞こえず電話できない人への対応を工夫してほしい」と訴えた。

市の弁護士職員で障害者・高齢者支援担当課長の青木志帆さんはホルモンが分泌されない難病であることを明かし「障害者などへの配慮を考えると、病気や障害があることをもっとオープンにできる社会になればありがたい」と述べた。

討論に先立ち、播陽幼稚園（中崎1）の園児39人が手話を交えた歌を披露。人権啓発作文やポスターの発表もあった。

手話を交えて歌う園児ら